特集・〈読み〉の研究史—古代文学研究語彙—

共同体・共同性・共同幻想

——発生論の言説空間Ⅱ——

村井　紀

一

古橋信孝は鼎談「文学の始原」(『国文学』一九八九年一月号)の中で、他の分野ではこの間「さまざまな概念が再検討されている」にもかかわらず、「国文学」の方は「旧態依然たる」ものがあると語っている。しばしば語られる「国文学」の後進性という言説の一つと言ってしまえばそれまでだが、私は別な感想をもつ。私の観察では「国文学」(古代文学)という学問の世界は、その対象との時間差にもかかわらず、つねにその時代の一番新しい、あるいは根底的であるとされる理論、思想が用いられるという逆説がしばしば見られるように思うからである。万葉研究でいうなら、アララギ派の万葉復興は流行の言文一致、写生、自然主義と切っても切り離せないし、「国文学」のそれもそうである。もっとも古い世界が、もっとも新しい思想でたえず洗われるという事態が見られるのである。

私の考えでは、国学、つまりは契沖以来そのような現象はすでに見られるのだが、これがそうそう手離しで喜べない事情は、日本浪曼派を見ればわかるし、昭和十年代の「国文学」の盛況ぶりもよく知られている。むろん、このことは今日になって、はじめて批評もできるのであって、当時は誰もこのことを疑わなかった。「国文学」を学ぶことは時代と直結しており、そこに誰も疑いをさしはさまなかった。もとより、異様な熱狂や御用学問は疑われたが、しかし、その〝直結性〟は疑われなかったのである。そして、今日も同じ風景が見られる。日本浪曼派と歴史社会学派とが、「古代」に対して「観念」的であることにおいてパラレルだと言ったのは鷹津義彦だったが、その歴史社会学派という先端のあとには、吉本隆明や柄谷行人の言説がテーゼとなって、つまりたとえば吉本主義となって、文体にまで影響を受けるに至っている。

こういう言い方をすると、気短かな読者は必ず、現代と切り結んでこそ学問だ、あるいは旧態依然たる文献学派よりはマシである、それに第一お前は何だ！と反応するだろう。しかし、私はこの種のいささか退屈な反応も含めて、現象にとどまってみたい。文体ということから言えば、そうそう人を批判できるわけではないが、幸か不幸か私には折口学派の無意味な文体コピーに悩まされた経験があり、さらに小林秀雄のそれ、そして吉本隆明、蓮実重彦などの文体コピー、含蓄に満ちたそれが語る独善性には閉口してきた。卓越したものにカブれることは誰でもあることだし、模倣のもつオリジナ

リティ（宮川淳）は、学ぶは真似ぶ（る）から来たという宣長の明証的な説教とは異り、注目に価する。しかし、奇妙にも口述筆記の文体をただ真似た折口学派の言説の循環的記述を見てきた私には無残な気がする。少なくとも文体の模倣によって思想性を示すような、考えているかのような気分になるのは錯誤である。むろんこれは私の苦い経験からいうのだが実際は単に考えさせられているだけのことだからだ。文学を研究するからといって文学的修飾句で語ったり、とにかく、キイ・ワードだらけの文体というもの、これは散文精神に欠けている。よくいわれるように文章は書いた途端、他者のものであるが、通常滅多なことでは他人は読まないものであり、多くは辛うじて仲間が複雑な心理下に読むだけである。

さて、私が先のパラドックスで言いたいのは、この現象を直視しないかぎり、吉本主義なり、柄谷主義（制度論？）なりに収まってしまい、やがてはそれぞれの立場（＝「方法」と言っているが、疑わしい。）なりに回収され、元も子もない、という点にある。私は吉本については、なぜ古代にでかけたかのか未だに不審で、一九六〇年（？）に「試行」という場所に閉じ籠り、今もそこにあることに違和感をもっており、柄谷主義に至っては苛立ちを覚える。それはともかく、私はここで、「国文学」の主体性やら自立やらを説くわけではないし、それほど反動的ではない。それを説くことがどれほど鎖国的で奇怪なことであるかは誰でも経験済みだと思うが、むしろ、自立や主体性が可能か、を問うことこそが必要だと思われる。

そして、これらのことは次のような《古代研究の罠》にかかわることだと思うのだ。

「ある誤った思いこみや固定観念が永いあいだ訂正されずにもっともらしく通用し、それに気づくものがなかなかいない、といったおめでたく、かつコッケイな現象は、どの学問分野にも多かれ少かれ見られるものだろうが、古代研究はそうした傾向のとりわけいちじるしい分野の一つといえそうである。文献資料が限られているため、その解説を通して意味を見きわめるのに推測や想像に頼る度合が相対的に高くならざるをえない、という事態とそれは関連する。つまり一つの考えなり説なりが事実の抵抗に出逢い、その力で否応なくひっくり返される機会が、そこでは非常に乏しいわけだ。そのことが古代研究の魅力や面白さとも微妙に包みあっているのだけれど、うっかりすると、私たちを即自性の天国の住人に落とし入れかねぬ罠があちこちに待ち伏せているのも確かである。」（西郷信綱「古代研究の罠」『古代の声』）

いうまでもなく、西郷氏のこの言説は、「八十島祭」についての「誤読」をとりあげた自戒に満ちたことばであって、このことをとりあげずに言うのは気が引けるが、そして現象的にはいわれる通りなのだろうが、それでも気になるのは、「古代研究」は、「文献資料が限られているため、その解読を通して意味を見きわめるのに推測や想像に頼る度合が相対的に高くならざるをえない」という言説である。「一つの考えなり説なりが事実の抵抗に出逢い、その力で否応なくひっくり返される機会が、そこでは非常に乏しい」ということである。常識といえば常識、また当然といえば当然な話である。しかし、この常識にはおかしなところがある。というのは、反対に今日残存する「文献資料」に倍するそれがあれば、いいかえれば「事実」なるものが沢山あれば、「固定観念」による「誤読」という「罠」に落ち入らずに済むのか、ということである。つまり西郷

氏のような思考こそは「古代研究」に特に顕著な信仰、また神話ではないのか。「古代研究の魅力や面白さ」とともに語られる常識、実はここで語られているのは、「古代」また「古代研究」にア・プリオリに特権性を付与しているのではないかということである。加えていえば「方法」はこの時どこに?といってもよい。

私の考えは単純であって、「誤読」なるものは「文献資料」の多寡にかかわるものではないし、仮にいくら「事実」なるものが転っていても、それをそれとする認識がなければ、そうなるわけでもないというところにある。「誤読」なるものは方法的にのみ言い得るのであって、しかもそれがしばしば創造的であるように、つまり個性的な読み方や他の分野からのメタフォリカルな読み方も含めて考えると真の、絶対的な「誤読」なるものが、はたしてあるのかどうか疑わしい。

「古代研究の魅力や面白さ」と共に見いだされる「文献資料」の多寡、また「事実」なるものが少ないこと、総じて「古代研究」の特殊な条件とも見なされがちなこれらの問題は、私の考えでは実は対象に対して、あらかじめ特権性を付与しており、このような常識、信仰、神話こそが、「方法」を排徐し、逆説的な事態を招いているように思われる。つまり「古代研究の罠」という言説にある《古代研究の罠》、そう言ってもよい。むろん、「文献資料」の豊富な、「事実」の多い、たとえば近代文学研究がまともか?そんなことはない。

二

「古代研究の罠」として提示される《古代研究の罠》——私がいうのはこの言説が「古代」なるものをあらかじめ拝跪しており、そこで「方法」を放棄していることにある。おそらく「文学の発生」という言説にもそれはある。

先だって私は、折口の発生論——その信仰起源説を疑うと書いたが、私の不審は、かれの言説が紀貫之のいわゆる和歌神授説からスサノヲという固有名をとり去り、かれの発明になるマレビトに置きかえたものにすぎないのではないか、という疑問であり、この単純な同一性が、どうして疑われないか、という点にある。(拙稿「西郷信綱——発生論の言説空間」『国文学』一九八九年一月号)むろんこのような単純化には、ばかげたところがあり、貫之についても、折口についても、私の同一視にも注が必要だろう。貫之については「心」なるものを見なければならないし、折口については、感動起源説がいうような突嗟の感動などでは文学表現がなぜ伝承されるに至ったのか理由がないというものであって、それが維持されるには「信仰」をおいてない、さらにそれが「文学の規範」に入ってきたのは「偶然」にすぎないというところにある。つまり折口の議論は、文学意識を念頭においた、いわば「作者」レベルと「読者」(「文学の規範」をもったもの)レベルとを同時に見ているところにあることは注意される必要があろう。しかし、にもかかわらず、ここでかれが「起源」また「発生」という概念で言うことが妥当か、またそれはいかなる言説であるかは改めて問われる必要がある。

というのは、この「発生」、「起源」、「胎生」、「誕生」ということばが、すべて生物学的言説であり、関係の網目、連鎖構造を構成させずにはおかないし、事実、折口の関心は「文学」のみならず、「道徳」や「芸能」の「発生」にまで及んでいる。そして、そうあ

ることで、「生」と「死」という言説を構成していること、一つの範型を形成している事態があり、「発生」という概念をア・プリオリに絶対化してしまっては問題の核心を外しかねないように思われる。

生物学的言説、もとよりこのことは「文学」だけのことではなく、「資本主義の発生」とも言うように広く使われているが、そうであればこそ「文学」において改めて検討する必要がある。むろん折口たちがこの語に依拠したのには、ダーウィニズム（進化論）や「社会有機体説」（スペンサー）など経験論があるが、それを「文学」の場に持ち込んだことも含めて、それがどんな言説かは問われるのである。たとえば古橋信孝はその『古代和歌の発生』の「序歌の発生」冒頭を「未明の彼方へ」という文章ではじめているが、そこでいう、次のような言説についても、問わざるを得ないだろう。

「なぜ繰り返し文学の発生を問わなければならないのだろうか。おそらく文学がわれわれにとってどう論じようとも捉え難い不可解さをもって迫って来るからにちがいない。それはわれわれを未明の彼方へ連れさってゆく呪力を秘めている。それゆえわれわれはその不可思議な力に心を委ねてまさに文学的な飛翔をすることになる。そこには文学の原理と個体の深部の闇がある。つまり文学の発生とはつねに現代への根源的な問いかけの方法なのだ。もちろんその問いとは論理を求めることである。しかし文学も個体も論理化していってなお見え難いものを見出すだけだ。したがってその未明に苛立ちながら、われわれにとって文学とは何かという原理を思考しつづける限り、文学の発生を問うことから逃れようもないのだ。」

ほとんどマニフェストに近い文章だが、古橋氏はここで「文学の発生とはつねに現代への根源的な問いかけの方法なのだ。」と言っている。「われわれにとって文学とは何かという原理を思考しつづける限り、文学の発生を問うことから逃れようもない」ことだというのである。

たしかにそうであるかもしれない。しかし、ここで私が見るのはこの言説が、「発生」を問うことは「文学とは何か」を問うこととして構成された、それ自身歴史的な言説だというところにある。しかもそれは一方で「死滅」の言説と共にあり、「文学とは何か」と問いかけた時、同時に「問いかけ」として「生」と「死」との範型が構成されてくる性格をもっている。

すでに前掲の文章でも言ったように、このモデルは正岡子規以来のもので、詩歌の「起源」（「発生」）を問う言説はその「死滅」を語る言説とパラレルにある。子規が「文学とは何か」と問いかけた時、「起源」を問い、「滅亡」を予見してしまうのである。（正岡子規「詩歌の起源及び変遷」明治二十二年四月、一八八九年）それは俳句・短歌の「滅亡論」ということだが、「文学」なるものを問いただす時、「起源」と「死滅」との位相のもとにそれは置かれる。つまり「文学」なるものが、生まれ――死ぬという生物学的言説下に見いだされており、これは近代以前には決して見いだせない、文学意識だと言ってよい。

たとえば、近代以前には「文学」が「不可解さ」をもつこと、さらには「未明の彼方へ連れさってゆく呪力を秘めたもの」としての「文学」はなかった。「文学も個体も論理化していってなお見え難いものを見出す」ようにはなかったのである。むろん、「文学とは

何か」という問いには「もののあはれをわきまへ知る」（宣長）という明証的な答えがあった。もとより「個体」も「見え難いもの」としてはなかった。それは素顔ではなかったにしても、はっきりとした輪郭をもっていた。たとえば隠居は隠居として、下女は下女として、つまり職分に合った形をもつという意味で明瞭であったからである。なお、宣長では古いというなら子規よりも少し前でもよい。「文学とは何か」以前に、「文学」は好きか、嫌いか、いるか、いらないか、肯定か、否定かが単にあっただけである。いや、私たちはこの範型が（片方でもいいが）近代とはいっても局部的にまた周期的に形成されていることを見た方がよいのかもしれない。「文学とは何か」という問いを前に「発生」や「死滅」に向い、それを問うものは現在もごく限られているからであり、古橋氏の言説がマニフェストである理由もそこにある。

そして、この言説の性格を問う時、この文学意識が、柄谷行人のいう、明治二十年代の「風景の発見」、つまり文学に「内面」を見いだすようなところに成立した言説であることは疑えないように思われる。（『近代日本文学の起源』）いいかえるなら、近代の遠近法の成立とともに見いだすのが、「発生」また「死滅」という「風景」なのだと言ってよい。そして、この子規の数学的（パーミュテーション）な同一性にそれを見い出すことにも象徴されているように、「発生」論もまたトポロジカルな性格を消せないとすれば、この言説は私たちにとっては、意外な相貌をあらわすかもしれない。森毅は「現代文化に数学がうめこまれている」（『数学という文化』）問題をしばしば論じているが、生物学的言説に「うめこまれている」数学、そしてそれらが「数学の影」（＝遠近法であり、「場所」である。）に包まれていること、つまり共に数学的な言説だからである。

それはしばらくおき、「風景の発見」は「言文一致」と切り離せないし、子規の議論（俳句・短歌の革新も含む）もそれを前提としているが、さらにこの文脈の中で、私たちの「国文学」を考えると、旧国学が芳賀矢一によって「日本文献学」としてとりだされ、契沖・真淵・宣長の系列だけが、復活し、再生している事態にも注意が向く。（芳賀矢一「国学とは何ぞや」明治三十七年、一九〇四年）かれらは何よりも「文」より「言」（音声）を重視したからであり、矢一もそうであったからである。

矢一が渡独して見いだす「日本文献学」なるものは、かれが信じたこととは異り、決して日本独自のものでも、また内在的なものでもなかった。かれが規定する「国学」＝「日本文献学」なるものは、すでに契沖段階で悉曇音声学、また〝グーテンベルク革命〟（マクルーハン）＝印刷術、従って原典・原稿作者至上主義（外山滋比古『異本論』）につまりは外部からのものに多くを負って見いだされたものだったからである。ごく簡単にいえばかれらによって見いだされた「日本」及び「日本語」「日本人」なるものは、外部によって見いだされている。たとえば、「上古」、「神国」、「神道」の特質は、「文字」なしで、なお自足的な共同体を形成していたという夢にあるが、これが見いだされるのは、もっぱら外部によって、この転倒においてである。つまり矢一が契沖らの「国学」とドイツ文献学とを同置できたのは偶然のことではなかった。皮肉な言い方をすれば、矢一は二重三重に転倒していたのである。

そして、遠近法にかかわってより直接性をもつと言ってよいのは、子規の言説と踵を接して、明治二十三年（一八九〇年）十月、

大学出たての三上参次・高津鍬三郎によって『日本文学史』が登場していることである。かれらの学生時代に「西洋」に「文学史」なるものがあり、「文学の発達を詳かにせる観、之を研究する順序の、よく整ひたるを喜」び、「我国にも彼に劣らざる」文学史が必要だという「慷慨の念」が起きた（「緒言」）と語っているが、むろんこれも「風景の発見」＝近代の遠近法の成立と不可分である。そうだとすると「発生」を問う言説（文学意識）はひょっとすると、呪われた主題であるのかもしれない。近代のナショナリズム（「国家」）の要請下に成立した「日本文学史」と、また「日本文献学」とのあやうい均衡関係をもつからである。

三

私はここで私たちがどのような問いを発し、またどこにいるかを考えてきている。「発生」と「滅亡」という言説は近代の遠近法がもたらした文学意識が、そのような問いを作っており、ここに埋め込まれている数学とその影も見おとせない。そして、「日本文献学」がとりだし、日本文学史として体系化された「方法」の背後にもそれはあり、それとのかかわりの上で古橋氏のいう「文学の発生とはつねに現代への根源的な問いかけの方法なのだ。」という言説も考えるほかにない。ただ、これまで述べてきたことからいえば、この言説は特権化できない。すでにそれが志向する相対化も歴史的に見いだされているし、この相対化の方向だけが「根源的」である保証はどこにもないからである。ここで参考になるのは「文学」のみならず多様なものの「発生」を考えようとした折口だが、かれのイデオロギー性を無視して、ここから出発するのは難しい。それはともかくこれまでの折口に関する言説は今日御破算にしないとどうにもならないことだけはたしかである。ともあれ、こういう私もたえず相対化の拘束をまぬがれないが、たとえば「沖縄」という「場所」についても、柳田・折口以来の同一視をやめてみたいと思っている。いわば言語の共同性だけを根拠とする「国文学」、「文学史」――沖縄文学は組み込めてもアイヌ文学は排除され、漢詩文もまたそうである――は魅力がない。その「日本語」にしても転倒性が見いだされるかもしれないからである。

こうして考えてくると「発生」論の言説にある「共同体」概念についても不審な点が見られる。一般に、私たちが他の分野との関係を考える時、概念に負うところが多いが、このマルクスやウェーバー以来の社会集団にかかわる「場所」の概念が「国文学」（古代文学）では間主観的に考えられていなかったかのような印象を与えるからである。

たとえば、「共同体」なるものは自足的で天国であるというようなイメージしかもたなかったような形跡がある。それは歴史社会学派以来の遺習だといってもよいが、ひょっとするとこのあたりに「概念」の「再検討」あるいはその交通を妨げてきた原因があるのかもしれない。

ここで斎藤英喜の「文学発生論の現在――〈共同性概念〉の検証として」（『国文学』一九八九年一月号）を見ると、「4多層的な共同体へ」という章にぶつかる。この「多層的共同体」なるものも、わからないが、わかったふりをして、進める。

「三浦佑之の『村落伝承論』（一九八七年）は、神謡（神語り）の〈語り〉の側へのこだわりから、『遠野物語』の呪いや妬み・

噂話の世界を「村落の暗部」として見ていく。それはたしかに歌にはならない世界への注視であった。しかし説話の様式を具体化していく論の展開は、結局〈始源〉からのずれとして「村落の暗部」を見ることでしかなかったようだ。〈始源〉の〈共同性〉はやはり豊かな安定した世界だった。また古橋も、「負の共同性」という視角からこうしたネガティヴな世界を見ようとしている。

(略)」

斎藤氏は「〈始源〉の〈共同性〉はやはり豊かな安定した世界だった。また古橋も『負の共同性』という視角」をもっていると報告しているのだが、ここにも顕著なように「共同性」ということばはかなり特殊な用法であるように思われる。つまり「共同体」(ここでは「共同性」だが)なるものをプラスのそれ、マイナスのそれがあると見ている。しかし、この「共同」という概念は、概念として考える時、もともとそのような主観的な判断をこえたものではなかったか。もしそこに「豊かな」であるとか、「負」であるという判断を入れるとすれば、再び主観にもどすことでしかなく、すでに概念(タ一ム)ではない。要するに「正」の「共同体」や「負」のそれはない。たんに「共同体」ということはできても「正」「負」をつけてしまえば概念としては崩壊する。たとえば、マルクスのいう「共同性」とはたんに「血統・言語・習俗」だったからである。また吉本隆明の「共同幻想」も、主観性のないものである。

それではこのような概念の崩壊の上に成立した概念?から何か見えるのだろうか。これについては何ともいえないが、結局、わかる者にはわかるという言説しか見いだせないように思われる。そして、もしそうだとするとそのように「国文学」を自立させてしまっており、なおいえば、「ポスト・モダン」であるとか、「ずれ」、「制度論」「構造主義」などをわれわれの外部に見いだしているようにも思われる。そんな具合にわれわれが「自立の思想的拠点」をここに見いだしているとしたら興醒めである。「制度」はたんに「制度」として貫徹しているのであり、「構造」もそうである。そして問題はそのようにしてわれわれは考えさせられていることである。いや、ともあれ、他人ごとではなく、キイ・ワードと〈 〉、修飾句の多用はやめてもらいたい。それは特権化の証拠である。

なお、柄谷氏の見いだす「制度」つまり「風景の発見」だが、私見では必ずしも明治二十年代にのみ固定することはできない。たとえば素顔などは序々にあらわれだしてきているからだが、柄谷氏の立論はパラダイム・チェンジの印象が強すぎるように思われる。

また、私がトポロジカルということでいおうとする折口の問題は西田幾多郎の「場の論理」や時枝誠記の国学的な「事としての言語観」つまり「言語過程説」として見いだされてくる「場所」に規定された「述語的同一性」としての「日本語の論理」(中村雄二郎『西田幾多郎』)と共に考えようとするところにあり、もしこれらが近代の日本のトポス「日本の哲学」(「思想」)また「日本語」の確立であるとすると「反言語学としての折口信夫」(井上隆弘「折口博士記念古代研究所紀要」第五集、一九八八年六月)の問題として改めて問われてくる。もとより大正十年(一九二一年)の折口の沖縄における「発生」論、また同時期のアララギ離脱と大正十五年の「滅亡」論に示される言説も、徹底的に「場所」の問題であり、その「滅亡」論を例にいえば「けるかも」(斎藤茂吉)の「述語的同一性」の「場所」(歌壇・結社という「共同体」)を他者(「読者」

また「人間」といっている。）の不在において退けるところにある。大正十年から昭和へ、京都にあって「絶対矛盾の自己同一」を見いだす西田、京城にあって「述語的同一性」として「日本語」を見いだす時枝、そして「場所」をもたぬ折口があり、やや位相は異るが同様に「場所」を見いだせず軽井沢で情死する有島武郎がいる。

折口の『言語情調論』は「言語の関接性」を見いだしたところにオリジナリティがありフォルマリズムにも似た考え方をしている。要するに「自己同一性」を疑うところにそれはあり、おそらくそこからスサノヲをマレビト（ストレンジャー＝A・シュッツ）におきかえる必要があった。むろん「国学」の「言」＝「事」＝「意」（心）も、そこで疑われた。しかし、世評の高いその独創性も時代のオリジナリティにはかなわない。その素顔の「痣」というエクリチュールは平田篤胤においてすでに露呈されていたからである。

注、なお本稿は「西郷信綱――発生論の言説空間」（前掲）の続きとして書かれた。折口の言語論については磯谷孝「折口信夫における時間と言語」（「折口博士記念古代研究所紀要」四集）櫻井進「迢空歌論における言語の直接性をめぐって」（同紀要五集）小林覚「枕詞『あられふる』をめぐって」（同上）があり、教示を受けた。なおまた、前掲の井上氏・鎌田東二との共同討議『他者のことば――折口信夫』（五月社、近刊）拙著『文字の抑圧』（青弓社、近刊）においてもこれらの問題を考えてきている。

「古代文学」総目録

27号（昭和六十三年三月一日発行）

特集〈神話研究史・読みと解体と〉

イザナキ・イザナミ神話―神話研究の内部と外部―　岡部隆志
アマテラス神話―古事記研究における〈読み〉と〈解体〉と―　板垣俊一
スサノヲ神話―〈神話〉研究と『古事記』―　飯田勇
八千矛神神話―〈歌謡と散文をめぐって〉―　居駒永幸
柿本人麻呂留京歌群の発想と表現　真下厚
まなご―流浪する幼神の系譜　清水章雄
三輪山型神話をめぐる語りの構造―『古事記』崇神天皇条の叙述を中心に―　石井正己